

第11話―ビッグ・エスケープ―（その7）

―A・D・2205 9・25 13:18 マクロスメインブリ
ッジ―

『バーミリオンリーダーよりデルタ1へ！艦隊周囲100宇宙キロ
までの偵察完了！これより帰還します！』

「こちらデルタ1、ご苦労様一条君！随分遠くまで行つたのね？」

未沙が行方不明になつてほぼ一ヶ月、彼女に代わり航空管制業務に
ついていたユキの笑顔も良かったが、何故か物足りなさを輝は感じ
ていた。

「どうしたの一条君、私の顔に何かついてる？さつきからぼんやり
してるようだけど…」

『いえ…今ちよつと早瀬中尉の事を考えてたんです…早瀬中尉なら
必ず文句を言つていたのにつて…あのおばさんいつもそうでしたか
ら…』

「まあ…未沙がおばさんなら私はどうなるの一条君？私は未沙より
も三つも年上なのよ！」

ユキの発言に、モニターの向こう側で輝は思わず驚きの声を上げて
いた。

『え…そんなんですか！？森さんが中尉よりも年上だったなんて…
なんせ森さんは凄く綺麗だし…』

輝の発言を受けて、横で二人の会話を聞いていたクローディアが通
信に割り込んできた。

「一条君！この私なんかユキよりさらに二つ上なんですからね！後で私達に何かおごりなさいよ！」

『そんなぁ…クローディアさんまで…』

輝がパネルの向こう側で恐縮しているとメインリーダーに反応があり、ヴァネッサが報告を入れていた。

「艦長！艦隊進行方向に重力震確認！デフォールド反応です！およそ500隻の艦隊が急速接近中！」

「何だと！直ちに戦闘配備！森君、全バルキリー隊並びにMS隊に出撃命令を出してくれ！」

「了解！デルターよりロンド・ベル全艦隊へ！直ちに戦闘配備をとって下さい！」

グローバルの命令を受け、ユキが全機に指示を出していると、アイムド02から出撃しようとしているフォッカーから通信が入っていた。

『こちらスカルリーダー！ただ今から出撃する！ユキちゃん待つてろよ、今夜はいいコトしようぜ！』

「はーい、お待ちしてまーす！部屋の鍵開けて待つてまーす！」

『……………了解…出撃する…』

いつものように下ネタでユキの反応を見ていたフォッカーは、意外な反応に言葉を失っていたがそれと同時にひと安心していた。

（ユキの奴…やっと俺の冗談についてこれるようになったな…まあこれなら安心だ…）

―同日 13:25 ゼントラーディ小型艦内―

「とつくにデフォールドしているんですよ！早く何とか出来ないんですか！？」

ゼントラーディ小型艦内の格納庫のバトルポッド内では、未沙が古代達を急かしていた。コウはエンジンチェックをしながら未沙を諭していた。

「まあ焦らずに早瀬中尉…」

「ウラキの言う通りだぞ早瀬君…焦ってもいい事はないぞ…ん！？これなら行けるはず！」

古代がレバーを動かすと、そのバトルポッド“リガード”は動き出し、それに気づいたゼントラーディ兵が何事かこちらの様子を伺っていた。

「敵兵が気づいたわ…」

「当たり前だろ…マックス、行けるか！？」

「いつでも…発射します！」

マックスがスイッチを押すとガトリング砲が発射され、側に近付きつつあったゼントラーディ兵を吹き飛ばし、さらに壁面を破壊すると破損箇所から艦外へと飛び出した。

周囲は既に戦闘が始まっており、その様子を見た未沙は一言呟いていた。

「ここが…太陽系かアルファ星系ならいいんだけど……」

第11話―ビッグ・エスケープ―（その8）

―同日 13:31 ミリア専用バトルスーツコクピット―

「フン…“ ロンド・ベル ” とやら、たいした事はないな…これのどこが手強い敵なのか…」

ミリアは愛機である深紅のバトルスーツ“ クアドラン・ロー ” のコクピットで呟いていた。

クアドラン・ローは両腕にロリー達三人を載せたカプセルを抱えており、ロンド・ベルの迎撃部隊を蹴散らしつつ目標であるマクロスに向けて飛び続けていた。

「あれか…“ 民間人 ” とやらが乗るマクロスと言う戦艦は…」

コクピット内のモニターでマクロスを捉えたミリアは、自分の機体を巧みに操作してマクロスの対空砲火をかい潜り、艦後方の外壁に取り付き、装甲を引きはがしてカプセルを投げ入れるとすぐさまその場から離脱して行った。

「こちら一級空士長ミリア！作戦完了、これより帰還します！」

ミリアが通信を送ると、モニターにはラプラミズの姿が映し出されていた。

『ご苦労…我々も戦線を離脱する…合流ポイントに向かえ…』

「了解！直ちに向かいます！」

―同日 13:36 古代達のバトルポッド内―

その頃、古代達四人の乗っているバトルポッドは今だに漂流を続けていた。

ポッド内ではマックスがロンド・ベルと連絡を取ろうと通信機器を操作していた。

「マックス、まだ連絡は付かないのか？」

「はい…やっているんですが………えっ…これは!？」

「どうしたマックス!？」

「かすかではありますが反応が……これは……ミンメイさんの歌だ!」

マックスが機器を操作すると、スピーカーからはミンメイの歌“私の彼はパイロット”が聞こえていた。それを聞いた四人は思わず叫び出していた。

「…と言う事は……ヤマトが…!」

「マクロスが…!!」

「ロンド・ベルが…!」

「…近くにいる…!!!!」

四人は手を取り合い、帰還の喜びに浸っていた。やがてマックスが調整の済んだ通信機を古代の前に差し出した。

「大佐! 軍用周波数キャッチしました! いつでも通信可能です!」

「これで…本当に帰れるのね…」

未沙が涙を浮かべていると、古代はそれを見咎めていた。

「早瀬君泣くな…泣くのは地球に無事帰ってからだ…」

「そう言う大佐だって…泣いてるじゃないですか……」

「何を言う…これは目にゴミが入っただけだ…」

「あの…そんな事よりも早く連絡を……」

「そうですよ大佐…」

コウとマックスもうつすらと涙を浮かべながら古代に通信を催促していた。

「こちら宇宙戦艦ヤマト艦長古代進以下四名、敵バトルポッドを奪取して漂流中……直ちに救援願います……」

第11話―ビッグ・エスケープ―（その8）（後書き）

ミリア搭乗の深紅のバトルスーツ“クアドラン・ロー”は、マクロ
ス劇場版に登場した機を出しました。

TV版も劇場版も、彼女の類い稀に見る機動性は他を圧倒させるに
は十分な機体でした。

この作品中、もしかしたらもう一人の深紅の機体が似合う男との対
決もあるかも……

第11話―ビッグ・エスケープ―（その9）

―同日 13:39 ヤマト艦内―

この通信を最初に傍受したのは相原であった。

初めはノイズ混じりで聞き取れなかったものの、次第にクリアになるにつれ彼の顔は晴れやかになっていた。

「真田さん！古代さんから…艦長から通信が入ってます！」

「本当か！？メインスピーカーに切り替える！」

相原がメインスピーカーに切り替えると古代の救援要請が流れ、第一艦橋の中は歓喜の渦で満ち溢れていた。

南部達“スリーアミーゴ”と土門は万歳三唱を繰返し、山崎は珍しく涙を浮かべて古代帰還を喜び、島と真田は握手を交わしていた。

「真田さん…やっぱり古代はたいした奴ですね！」

「ああ、これでマクロスにいるユキも喜ぶだろう…」

古代帰還の知らせは、たちまちのうちにヤマト艦内に広がり、中でも佐渡はアナライザーと共に医務室で祝杯を上げていた。

「佐渡センセイ！古代サン帰還ヲ祝ツテ乾杯シマシヨウ！」

「そうじゃな！今日はめでたい！久々に一杯やるかの！………おつとその前に…」

佐渡は自室のテーブルに置いてあった初代艦長沖田十三の写真にコ

ツプ酒を供え、一言呟いた。

「沖田艦長…古代が帰って来た…さすがにあんたの息子じゃないか…ワシは今日ほど嬉しい事はない……」

―同日 13:40 アルビオンMS格納庫―

その頃アルビオンのMS格納庫では、シナプスからの連絡を受けた二ナがモーラと共にマクロスに向かうべく、連絡機へと乗り込んでいた。

「コウが…帰って来るなんて…夢じゃないわよね…」

連絡機の席で涙ながらに二ナが呟いていると、アルビオンに帰還途中のバニングから通信が入って来た。

『二ナさん聞いたか！？ウラキの奴が帰って来たぞ！これも古代のおかげだな…さすが俺の教え子だ……』

（バニングはロンド・ベル配属以前、地球本星で士官学校の教官を勤めており、古代や島を育て上げていた事もあり、今回思いがけない出来事とはいえ、彼らと再会を果たしていたのであった。）

「そうですねバニング少佐…」

二ナが涙ながらに答えていると、スターク・ジェガンに搭乗しているキースからも通信が入って来た。モニターに映ったキースの顔はヘルメット越しとはいえ、涙でひどい有様であった。モーラは呆れ果てた表情でキースに切り出していた。

「ちょっとキース…あんななんて顔してんの…!？」
『だってモーラ…こんな嬉しい事はないじゃないかあ~~~~!?!』
「…………駄目だこれは…完璧に自分を見失ってる…」

第11話―ビッグ・エスケープ―（その9）（後書き）

今回の作品限定で、バニングの設定を変更しました。

古代達の教官をしていたという設定は、いささか強引でしたがその点に関してはご容赦を…

また、キースの愛機をジム・キャノン から、最新作、「機動戦士ガンダムUC」に出て来るスターク・ジェガンに変更しました。
これも一応援護タイプと言う事なので、キースなら乗りこなせるはず…

次回、古代とユキが久々の再会……

第11話―ビッグ・エスケープ―（その10）

―同日 13：43 マクロスメインブリッジ―

古代帰還の通信が流れたメインブリッジでも、その場にいた一同は歓喜の渦に見舞われていた。中でもユキは、古代の声を聞いた時から嬉し涙に暮れていた。

そんな中、シャミーは泣きじやくりながらユキに抱きついていた。

「ユキさあん！本当に良かったですう〜！」

「ちよつとシャミー！あんた何泣いてんのよ！」

「そうよ！一番泣きたいのはユキさんでしょうが！」

キムとヴァネッサの突っ込みにもかかわらず、シャミーはひたすら泣きじやくっていた。

「みんなありがとう……私……こんな嬉しいことない……」

ユキが涙に暮れているとフォッカーから通信が入り、古代達の乗ったバトルポッドを確保したと報告が入った。

『これよりアームド02に帰艦する……ユキ、指示頼むぞ……』

涙声になりつつあるフォッカーの様子をモニター越しに確認したクローディアは、すかさずフォッカーに突っ込みを入れていた。

「ちよつとロイ……あなた何泣いてんのよ……」

『クローディア……これが泣かずにいられるか……今夜は久々に上手い

酒が飲めるぞ……』

「全くロイつたら……さあユキ、最後のひと仕事……お願いね……」

クローディアに促され、ユキは溢れる涙を拭い去り、管制指示を出していた。

「はい……こちらデルタ1……スカルリーダー及び捕獲したバトルポッドは……直ちにアームド02に着艦して……下さい……」

管制指示を出した後、ユキはその場の一同に促され、アームド02の格納庫へと走り出していた。

（古代君が……帰って来る……夢じゃないわよね……）

―同日 13:52 アームド01格納庫―

古代達四人は、輝のバルキリーによってバトルポッドから降ろされると、そこには連絡を受けた藤堂長官とアルビオンから着いたばかりのニナとモーラが待ち受けていた。

「古代……無事だったか……」

「はい……ロンド・ベル司令並びに宇宙戦艦ヤマト艦長古代進以下四名、敵陣よりただ今帰還しました……」

「ご苦労だった……詳しい報告は後にして、まずはゆっくり休みたまえ……」

古代と藤堂が話している横ではコウとニナ、未沙、マックスと輝、柿崎がそれぞれお互いの再会を喜び合っていた。

そんな中、ブリッジからひた走ってきたユキが現れると、古代はすぐさまユキを見つけていた。

「ユキ……」

「古代君…会いたかった…」

ユキは古代の側に駆け寄り、彼に抱き着いて胸の中で泣きじゃくっていた。

周囲にいた者全ては、思わずもらい泣きをして二人の再会を祝していた。

そんな中、未沙だけは複雑な心境で古代とユキの姿を見つめていた。ゼントラーディに捕らえられ、数日間——正確にはほぼ一ヶ月——行動を共にして、不本意ながらゼントラーディ人の前で古代とキスした事により、未沙の中では自分でも気付かないうちに古代に対するほのかな想いが芽生え初めていた。

（一体何かしら…古代さんに対するこの想いは…昔、ライバーに同じような想いをしたけど…）

第11話―ビッグ・エスケープ―（その10）（後書き）

未沙の古代に対する想いが芽生え初めました…

この先一体どうなる！？

未沙は自分の想いを古代に伝える事が出来るのか…？

それはまた後のお楽しみ…

第12話―ブラインド・ゲーム―（その1）

― A・D・2205 9・25 22:56 ゲストルーム ―

「全く…古代の奴は飲み過ぎだ…これじゃこの前の逆パターンだ…」
「仕方ないですよフォッカー少佐…古代さんは三人を守ろうとして立派に責任を果たしたんですから…」

文句を言うフォッカーに、アムロが答えていた。

二人は古代をソファに寝かせると、後ろから心配そうな表情のユキに話し掛けていた。

「とにかく良かったユキちゃん、今日から安心して眠れるな…」

「そうですね森さん…とにかくひと安心して下さい…」

「フォッカーさんもアムロ君も本当にすいませんでした…モンシア中尉が少々飲ませるからこうなってしまうて…」

「な…に、モンシアの奴には後できつくお灸を据えるさ！まあそのおかげで……」

「ちよつとフォッカーさん！その先は言っちゃダメ！んもう…相変わらずエッチなんだから…!?」

ユキの発言にフォッカーは思わず笑い出し、アムロはニュータイプ
の直感でその事に気付いて顔を赤くしていた。

「んじゃ、俺は帰るからよ！」

「僕もこれで失礼します…明日の朝古代さんによろしく伝えて下さい…」

「ええ…二人とも遅くまでごめんなさいね…」

二人を見送ったユキは部屋に戻り、ソファで相変わらず気持ちよさ
気に寝息を立てている古代を見つめていた。

（はぁ…せっかく帰ってきてくれたのにこんなじゃ…もういい！
お風呂に入ってさっさと寝よう！）

早速ユキはバスルームに行き、シャワーを浴びてバスタブに浸かり
ながらこの一ヶ月の事を思い起こしていた。

輝とミンメイを連れ戻しに行った未沙がゼントラーディに襲われ、
彼女達を救うべく出撃したまま行方不明になった古代の事を思い出
さない日はなかった。

昼間は任務に明け暮れていたものの、夜眠る時に枕を涙で何度濡ら
した事か…

（それが今日、無事に帰還して二人で過ごせるかと思っただけ…も
う！古代君のバカ！）

あまり考えてものぼせるだけなので早々にバスタブから上がり、用
意していたお気に入りのピンクのシースルのネグリジエに着替え
てバスルームのドアを開けた時、ソファで眠っているはずの古代が
立っていた。

「ちょっと古代君…寝てたんじゃなかったの？」

「ああ…寝てたけどバスルームから水音がしたんで目が覚めて…一
緒に入ろうとここまで来たら君が出て来たんで…」

古代はそう言っているとユキを抱きしめ、耳元で囁いた。

「ユキ……君が欲しい……」
「……私も……古代君が……」

ユキが最後まで言おうとした時、古代はユキを抱き上げそのままベツドへと連れて行った……

―同日 23:31 ゲストルーム―

ひとしきり愛しあった後、ユキは古代の胸の中でまどろんでいた。

「私……ずっと寂しかった……あなたがこの一ヶ月いなかったおかげで……」

「敵に捕らえられている間、ずっと君の事を考えてた……それよりも少し痩せた？」

「大丈夫……いつも通りちゃんと食べてたし……それにブリッジのみんなも親切にしてくれて……」

「後でグローバル艦長にお礼言わなくちゃな……それよりもあれから一ヶ月たってたなんて……まるで浦島太郎になった気分だ……」

古代の発言にユキは思わず吹き出していた。

「やあね古代君たら……もしかして一気に年取った気分？」

「おいおい……何て事言うんだユキは……」

「冗談よ……でも未沙達を守るの大変だったでしょ？」

“未沙”と言うユキの発言に、古代は思わずびくりとしていたが、あえてそんなそぶりは見せずにユキに切り返していた。

「いや……それより早瀬君と話して気付いたが…彼女は結構いい人だったよ…」

「前に言っただでしょ？未沙は普通の子だって…だからって未沙に浮気なんかしちゃだめよ…」

再び古代はびくりとしたものの、そんなそぶりも見せず今度は何も言わずにユキの唇にキスをしながら囁いた。

「大丈夫…僕が愛しているのは君だけさ…それよりもさユキ……」
「もう…古代君たら……」

第12話―ブラインド・ゲーム―（その1）（後書き）

劇中、ユキの着ていたピンクのネグリジエ…

ヤマトパート1第19話に出て来ましたが、これに関しては数多くの方が二次創作で取り上げていますが今回の作品でも取り上げました。

しかしユキつてもしかして……出したがり？

森 ユキ

「いいじゃない！たまにはサービス、サービス！」

古代 進

「君は他のアニメキャラか!？」

第12話―ブラインド・ゲーム―（その2）

― A・D・2205 9・26 10:41 マクロス艦内市街地
カフェテリア―

翌朝、古代とユキは遅い朝食を取るために、いつものカフェテリアを訪れていた。

（実を言えば朝方まで愛しあったおかげで10時過ぎまで寝ていたせいもあるが…）

カフェテリアのドアを開け、中に入ろうとした古代は思わず目を丸くしていた。

そこにはプルとシンタ、クムの三人が走り回り、その後をファが止めようと躍起になっていた。

「プルプルプルプルプル〜〜〜〜〜〜！！！！！！」

「いやっほ〜〜〜〜い！！！！！！」

「アハハ〜〜〜なんか面白〜〜〜い！！！！！！」

「こら〜〜っ！プルにシンタにクムっ！周りの迷惑考えなさ〜〜〜い！！！！」

この様子を見た古代は、そばにいたユキに思わず問い掛けた。

「……………ここっていつから小学校になった……………？それに奥のテーブル席に学生らしい集団がいるんだが……………」

絶句している古代を見て、ユキは改めて事情を説明していた。

「そういえば古代君は知らなかったのよね…あの子達もロンド・ベルの一員なのよ…古代君達が帰ってくる五日前に合流した、ネエル・アーガマ艦隊に乗り込んでいる子達なのよ…それも戦いで親兄弟を亡くした子達がほとんどで、平均年齢が15歳前後と言う話よ…」

ユキが説明していると、二人の姿を見たプルが近付き声をかけてきた。

「お姉さん、隣にいるおじさんって誰なの？」

「お…おじさん!？」

プルのとんでもない発言に、古代は思わず絶句していた。

これまで“おじさん”と呼ばれたことはなく、(例外としては、三年前の暗黒星団帝国戦で散った姪のサーシャに“叔父様”と呼ばれた事はあるが…)

自分でもまだまだ若いと言う自負はあったが、さすがにプルの突拍子もない発言には白旗を上げるしかなかった。

そんな時一人の女性士官が近付き、プルをたしなめていた。

「プル、この人はおじさんじゃないのよ!ヤマトの古代艦長よ…」

「あの…あなたは？」

「申し遅れました…私はドック艦ラビアンローズ艦長を務めるエマリー・オンス大尉であります…あの……お会いしなかったです古代艦長!」

エマリーはそう言うと、いきなり古代の両手を取り、握り締めていた。

「な……なんですかエマリー大尉!？」

「私、歴戦の英雄である古代大佐にお会いしたかったです！こっ
やっってお会いできるなんて夢のようだわ！」

エマリーの発言に古代はうろたえ、横にいたユキは思わずムツとし
た表情浮かべていた。

（何よ古代君！美人に言い寄られてデレデレしちゃって！）

そんなユキの様子に気づいた古代は慌てふためいて、エマリーの手
を離してユキの事を切り出そうとした時、当の彼女が先に切り出し
ていた。

「大佐！私はこれからメインブリッジに行つて、早瀬大尉との事務
引き継ぎがありますのでこれで失礼しますっ！」

そう言うなりユキは早足でカフェテリアを出て行き、メインブリッ
ジへと向かつて行つた。

その様子を見ていた古代は冷や汗をかきながら考えていた。

（……どうすりゃいいんだ…後で謝らないとこれからが大変だ…）

一方、テーブル席でこの様子を見ていたジュードー達は顔を付き合わ
せ、何事かを話していた。

「あれ見てどう思う？」

「何か…ブライトさんの時より凄い事になりそうだ…」

第12話―ブラインド・ゲーム―（その2）（後書き）

エマリーさん、ブライトに代わって古代に乗り換えました。
これから先、どのような展開になるかぜひお楽しみに！

第12話―ブラインド・ゲーム―（その3）

―同日 10:52 マクロス艦内―

その頃、ロリー達スパイ三人はマクロス艦内を当てもなくさまよっていた。

前日、ミリアの駆るクアドラン・ローがカプセルをマクロス艦内に投げ入れたのはいいが、目標地点の市街地からかなり離れたエアロツクだったため、この日はその場に留まり、一夜明けてから行動を開始していた。

「なあ……どうでもいいがこの格好何とかならないのかよ……」

ワレラが情けない声でロリーに切り出していると、コンダも同調していた。

「ロリーの言う通り……いくらマイクロンに関する資料が足りないからって、こんな格好では落ち着けないよ……軍服が欲しい……」

この時、彼ら三人が着ていたのは黒い一枚の布であり、地球人から見れば怪しまれる事一目瞭然と言っていた。たちであつた。

そんな中、人が来る気配を感じた三人は物陰に隠れていた。

現れたのはこのマクロスに乗艦している男性士官であり、その男はある部屋……更衣室に入り、しばらくして私服に着替えた彼は携帯電話片手に何かを話しながらその場を去って行った。

「……おい……見たか？」

「ああ……あの男、さっきと違う軍服を着ていたぞ……」

「……って事は…あの部屋に軍服がある!」
「よし!早速あの部屋の中に入って軍服探そう!」
「おっっ!」

―同日 11:01 マクロスメインブリッジ―

(……ユキさん、ゆうべどんな顔して古代さんと……)

メインブリッジでユキとの事務引き継ぎの最中、未沙はそんな事を考えていた。

「……で、引き継ぎは以上です、早瀬大尉。大尉?聞いてるんですか?」

ユキの問い掛けに未沙はようやく我に返り、その様子を見ていたユキは未沙にそつと囁いていた。

「ちょっと未沙…疲れてるの?なんかさっきからぼんやりしてるようだけど大丈夫?」

「え…大丈夫ですよユキさん…」

「それならいいんだけど…でもあなた昇進して大尉になったんだから、しゃきつとしなきゃ!」

「了解です…でも不思議なんですけど、私と同時にウラキ少尉とマックス少尉が揃って中尉になったのに、どうして古代さんだけが昇進しないんでしょうね?」

「そうよねえ…敵陣から無事帰還したんだから特別昇進の対象になってもいいはずなのに……それよりもみんな聞いてくれる!?ラビ

アンローズのエマリー艦長が古代君に言い寄るの！古代君たら満更でもない表情してたし、私もう腹立てちゃって！」

凄い剣幕でまくし立てるユキに、ヴァネッサが衝撃的な発言をしていた。

「あの…聞いた話しなんですが…エマリー艦長ってロンド・ベル副司令のブライト大佐と以前不倫関係にあったとか…」

その爆弾発言に一同はどん引きし、中でもユキは今にも泣き出しそうな表情で呟いた。

「古代君に限ってそんな事はさせないわ…あの女がそう言う事するなら私にだって考えがあるわ……………」

そのユキの表情を見ていた未沙はひそかに思っていた。

（恋する女って…命懸けなのね…いずれ私もそうなるのかしら……）

第12話―ブラインド・ゲーム―（その3）（後書き）

ロリー達スパイ三人組がマクロス艦内に侵入して初めての仕事が服探し……

TV版では何故か女子更衣室に忍び込んだ揚げ句、ロリーがスカートを履いてしまい再び着替える始末……

今回は彼らのために、男子更衣室にしました。これで彼らもひと安心！

次回、揚羽会長が久々の登場！

古代に対して進退問題突き付ける……

どうする古代！

第12話―ブラインド・ゲーム―（その4）

―同日 13:08 マクロス艦内大会議室―

この日の午後、ロンド・ベルの緊急ミーティングが開かれ、ゼントラーディに捕らえられた古代達四人による報告会が行われた。各艦の艦長並びに主なスタッフは、古代の報告にただ呆然とするしかなかった。

何しろ今まで接触して来た異星人とは異なり、文化を持たないただ戦うためだけの種族だけに、彼らの受けた衝撃は並々ならぬものがあった。

（ただし、古代と未沙がキスした件に関しては四人の暗黙の了解で伏せられていた……）

大会議室の中は重苦しい雰囲気にもまれていたが、話を黙って聞いていた藤堂が切り出していた。

「諸君！いたずらに不安な気持ちになっても仕方ない！ここはとにかく冷静になつて考えてみようではないか？」

この藤堂の発言を受け、一同は彼の意見に賛同していた。だが、この会議にオブザーバーで参加していた揚羽会長が挙手して発言を始めていた。

「一通り話を聞かせてもらったが、私からある提案を出そうと思う……特に古代艦長……あなたの責任問題についてだ……」

「責任問題…それはどう言う事ですか？」

古代がいぶかしげな表情で問い返すと、揚羽会長は不敵な笑みを浮かべていた。

「要するにだ…君はロンド・ベルの司令であるにも関わらず、この一ヶ月もの間ずっと不在だった…それもゼントラーディと言う異星人の捕虜と言う形でな…」

勿体振る揚羽会長に周囲は“またか”と呆れ始めていた。

シナプスはそんな一同の代表として揚羽会長に切り出していた。

「……それで会長、あなたは何が言いたいのですか？」

揚羽会長はシナプスをジロリと睨みながら爆弾発言をしていた。

「ここにいるロンド・ベル司令、並びに宇宙戦艦ヤマト艦長古代進の解任と地球連邦軍からの退役を要求する！」

大会議室内はこの発言に対する抗議で満ち溢れ、逆に揚羽コンツェルンに対する非難までが続出する始末であった。

そんな中、揚羽会長はその周囲の抗議を一喝していた。

「諸君、黙りたまえ！私は経営者であると同時に、連邦軍の最高顧問でもある！君達のような者をすぐにでもクビに出来るのだぞ！…とにかく、古代艦長は今回の件に関しては全責任を取らなければならんだ！何しろ連邦軍が保有するバルキリーやガンダムといった特一級の兵器を敵に破壊されたのだからな！」

揚羽会長の発言を受け、コウと未沙が反論に転じていた。

「会長、それは違います！ガンダムフルバーニアンを破壊されたのは自分の腕が未熟だったからであります！責任は自分にあるのに、どうして古代大佐が責任を取らなければならないんですか！？」

「そうです！元はと言えば、ミンメイさんを連れて勝手に飛び出した一条中尉にも責任があるはずです！」

揚羽会長は二人の反論にも動じる事なく、さらに発言を続けていた。

「君達は黙りたまえ！とにかく全責任は古代大佐にあるのだ！この際だ…古代大佐、君の意見を聞こうではないか？」

今まで全員の意見を黙って聞いていた古代は、立ち上がって切り出していた。

「自分は辞めるつもりはありません！これまで通り、この艦隊の総数10万人の人々を守らなければならないのです！それをあなたは途中で投げ出せと言うのですか！？会長の意見はあまりにも横暴です！この要求の撤回を求めます！」

古代の力強い発言に、揚羽会長を除く一同から拍手喝采が浴びせられていた。

それでも揚羽会長は不敵な笑みを浮かべつつ、さらにある提案を切り出していた。

「あくまで解任要求を撤回しようと言うのか…ならば条件がある…：今から8時間以内に、このロンド・ベル艦隊全将兵、並びにマクロスにいる民間人の総計10万人全員の署名を集めれば解任要求を撤回してもいいのだがね……」

突然の揚羽会長の要求に、その場にいた一同は思わず絶句していた。そんな雰囲気の中、揚羽会長は不敵な笑みを浮かべつつ呟いていた。

「何も全地球圏の総人口30億人分とは言っておらん…さっきも言ったように10万人分だけでいい…たやすいはずだ……」

第12話―ブラインド・ゲーム―（その4）（後書き）

前回の後書きで“ロリーがスカート……”と書きましたが、正しくは“ワレラがスカート……”でした……

度々の誤字、深くお詫びします……

次回、署名運動に奔走するロンド・ベル一同の姿を描きます……

第12話―ブラインド・ゲーム―（その5）

―同日 13:59 アームド01格納庫―

「そんな…冗談じゃないですよ！本来なら僕が責任を取らなければならぬのに、どうして古代先輩が…」

アームド01の格納庫で輝が自機を整備中、フォッカーと柿崎から古代解任の件を聞かされ、唇を噛み締めつつ呟いていた。

「それで隊長は、当然古代大佐の解任に反対すよね！？」

「当たり前じゃないか！今古代先輩を解任したらこれから先どうすりゃいいんだ！何なら今から揚羽会長に直談判しに行つて来る！」

柿崎の問い掛けに輝が答えると、フォッカーが即座に切り返していた。

「まず無理だな…あの会長は事前にアポイントを取らないと会えそうもない…輝のようなペーペーから連邦政府のお偉方…揚げ句の果てには、自分の家族にまで事前のアポイントを強要しているらしい…」

フォッカーの発言に輝と柿崎が絶句していると、アームド01にヤマトの連絡機が到着していた。

連絡機のゲートが開くと、中から坂巻、仁科、太助、土門、それに揚羽会長の息子である揚羽 武が下りて来た。

「何だ？ヤマトの若手連中勢揃いでどうした？」

フォッカーが不思議そうな表情で呟くと、一同を代表して坂巻が切り出していた。

「少佐！俺達五人が手分けして、ヤマトクルー600人分全員の署名と血判状を集めて来ました！」

「血判状って……お前らそこまでして……」

坂巻の発言にフォッカーが絶句していると、揚羽が切り出していた。

「少佐…親父は昔からヤマトの活躍を疎ましく思っていたのはご存知ですよね……」

「ああ…本来ならASS-1…今のマクロスの修復を揚羽コンツェルンが独占し、対ガミラス戦に投入するはずだったのが、作業が遅れたおかげで中断の憂き目にあってしまった…そのうちにイスカンダルからのメッセージが届いて、南部重工で建造していたヤマトが出発したのはみんな知っての通りだ…要するにお前の親父さんの頭は、ヤマトに対する嫉妬心で一杯なんだろう…」

「ええ…その事については親父に成り代わり謝罪します…」

揚羽が頭を下げようとすると坂巻が彼を一喝していた。

「おい揚羽！そんなに頭を下げるな！さっきも言ったろっが！お前はお前、親父は親父だってな……とにかくこの件に関しては気にするな！それよりも少佐、みんなで手分けすれば10万人分なんてあつという間ですよ！早いとこやって古代艦長のクビを繋げないと！なあみんな！」

坂巻の発言（と言うよりは演説…）を聞いた一同は頷き合つと、ア

「ムド01の格納庫を後にして市街地へと向かって行った。

この様子を見ていたフォッカーは目頭を熱くしながら呟いていた。

「さすがヤマトクルーだ…古代もいい部下を持ったな……輝、俺達も市街地に行くぞ！」

「了解です先輩！あ…その前にこの事をブリッジの早瀬大尉にも知らせて来ます！」

「ああ！人数は多い方がいい…頼むぞ！」

第12話―ブラインド・ゲーム―（その6）

―同日 14:08 マクロスメインブリッジ―

「冗談じゃないわよ！こんな要求ってありなんですか！？」

「そうですよ！どうにかありませんか艦長！？」

メインブリッジでキムとシャミーが揚羽会長の発言に憤り、グローバルに抗議していた。

「しかし…あと7時間以内に10万人分の署名が集まるかどうか…」

…」

グローバルが不安気に火のついていないパイプを握り締めながら呟いていると、未沙が固い決意をぶつけていた。

「艦長、私は可能だと思いますよ…ここで諦めている場合じゃないんです…私達がゼントラーディに捕らえられた時、古代大佐に“諦めるな…最後の最後まで信じていれば道は開かれる…”と励まされました…ですから私達も最後の瞬間まで諦めちゃいけないんです！」

未沙が涙混じりにグローバルを説得している所に、輝がブリッジに息せき切って入って来た。

「早瀬大尉！今ヤマトの坂巻大尉達がやって来てるんですが、ヤマトクルー全員の署名を五人で手分けして、たった30分で集めたそうです！」

「一条君、それ本当なの！？」

「ええ！だからやってやれない事はないんです！あの会長の鼻を明かすには、みんなの力が必要なんです！」

輝の必死の説得に、ようやくグローバルも腹を決めていた。

「分かった！とにかく今からでもやってみよう！早瀬君、君はキム君とシャミー君と一緒に市街地で署名活動に行ってくれ！もう既に森君達もやっているはずだ！私もすぐに行く！それと万一の事を考えて、クローディア君とヴァネッサ君は残ってくれ！後を頼む！」

「了解！！」

―同日 14:21 マクロス艦内市街地―

輝、未沙、それにシャミーとキムの四人が市街地に着くと既にユキを始め、ユキの両親の浩二と晴美、ジュードー達シャングリラチルドレン……その他大勢のロンド・ベルメンバーが署名活動を行っていた。その中にはミンメイとカイフンもあり、特にミンメイはサン格拉斯もかけず、私服のままにいるのに道行く人々に大声で叫んでいた。

「ロンド・ベル司令並びに宇宙戦艦ヤマト艦長古代進さんの解任に反対の方！こちらに名前を書いてくださーい！」

そのせいもあってか、署名運動をしているメンバーの前は大勢の市民でこった返していた。

輝と未沙は何とかミンメイの側に来ると、彼女に問い掛けていた。

「ミンメイ、どうして君が…」

「ホント……そんなに大声出したら歌えなくなるわよ…」

「輝…それに早瀬さん…今回の件は全て私のわがままから起きた事なの…あの分からず屋の会長をギヤフンと言わせる事が出来るなら歌えなくなってもいい…そう思ったらいてもたってもいられなくて……」

「そうか…ありがとうミンメイ…よし！それじゃ俺も！宇宙戦艦ヤマト艦長古代進さんの………」

一方、ようやく市街地にたどり着いたロリー達スパイ三人は、ごつた返す市民の姿を見て一様に驚きを隠せずにいた。

「な、何だこの混雑は…」

「分からん…何かの集会か？」

「前にも見たけど、大勢の男と女が混ざってる…」

三人が呆然と立ち尽くしていると、ユキの母である晴美が側にやって来た。

「すみません！私の義理の息子になる予定のヤマト艦長古代進さんの解任要求に反対する署名活動をしているの！お兄さん達、ここに名前を書いて下さいな！」

いつもの如くまくし立てる晴美に圧倒された三人は、仕方なく覚えたての地球文字でそれぞれの名前を書くと、晴美は一礼してその場を後にしていた。

三人はそんな晴美を見送ると、ある事に気付いていた。

「なあ……“コダイススム”って名前、聞いた事ないか……？」

「ああ……あの時の捕虜の名前だろ？それがどうかしたのか？」

「ああ……ちよつと気になって……っておい！もしかしてあそこにいる女……あの時の……」

コンダが指した方向に、署名活動に取り組んでいる末沙を見つけ、三人は呆然としていた。

「あいつらどうやって脱出したんだ……？」

「分かん……これも“プロトカルチャー”の力か……」

第12話―ブラインド・ゲーム―（その6）（後書き）

前回、坂巻が“ヤマトクルー600人分…”と言っていました。当然ならこれくらいの人数がベストかと…

ヤマト本編で設定されていた“114人”では少なすぎて、何かあった時に色々と大変じゃないかと思えます。

（しかし当時のヤマトの制作者は何を考えてクルーの数を決めたのか…）

次回、モンシアが署名活動に駄々をこねます…
その理由とは！？

第12話―ブラインド・ゲーム―（その7）

―同日 16:06 アルビオンMS格納庫―

「ふざけるな！何で俺が署名しなきゃならねんだ！あのミニスカねーちゃんの彼氏が辞めさせられようと、俺の知った事じゃねえ！」

アルビオンのMS格納庫でモンシアが署名用紙を前にコウを相手に毒づいていた。

「モンシア中尉！この艦で署名していないのはあなただけです！とにかくお願いします！」

「モンシア！いい加減ダダこねるのはやめろ！今ここで古代大佐が辞めちまったら、誰がこの難局を切り抜けるんだ！？」

「そうですよ中尉！ここは素直にサインして下さい！」

ベイトとアデルがモンシアに抗議し、周囲ではアルビオンクルーが事の推移を見守っていたものの、それでもモンシアは断固拒否を続けていた。

「いいか、大体ウラキの奴がガンダムで出撃したのがいけねえんだよ！揚げ句の果てにガンダムをセントラーディとやらに破壊されちまってよ！本当ならお前も一緒にクビになるべきなんだよ！」

「しかし中尉！」

「しかしも糞もあるか！いい気味だ、これであのミニスカねーちゃんをギャフンと言わせられるぜ！」

モンシアの発言に、コウは思わず腹の中が煮え繰り返っていた。

（サインを拒否する理由が森大尉だなんて…こうなったらぶん殴ってもサインを書いて貰おうか…それが元で退役するはめになったって構うもんか！）

コウはそう思い行動に移そうとした時、二ナがモンシアの前に立ちはだかり、いきなり彼の頬に平手打ちを食らわしていた。この様子を見ていたアルビオンクルーは呆然とし、殴られた当のモンシアは憧れの二ナから受けた仕打ちに圧倒されていた。

「二…二ナさん…」

「モンシア中尉…あなたは森さんがどんな思いで古代大佐を待っていたか分かりますか…あの人は、何ヶ月でも何年でも待つつもりだったんですよ…それをあなたは…」

そう言うと二ナはその場で泣き崩れていた。そこへ今まで一部始終を見ていたシナプスがモンシアの前に姿を見せた。

「モンシア中尉…二ナ君の気持ちも分かってやりたまえ…いくらこの前の件があるからとはいえ、森大尉の事を考えたらそのような事は言えないはずだ…」

「はあ…分かりました艦長…二ナさん…あんたにや負けたよ…」

モンシアはそう呟くと、コウの持っていた用紙にサインすると一同から拍手喝采が沸き上がっていた。シナプスはそんな一同に切り出していた。

「とにかく、非常要員以外は今からマクロスに行って署名活動をしたまえ…あの揚羽会長の鼻をへし折ってやらんな…」

第12話―ブラインド・ゲーム―(その7)(後書き)

次回、いよいよ古代の運命が決まる…

果たしてどうなる!?

第12話―ブラインド・ゲーム―（その8）

―同日 21:15 マクロス艦内大会議室―

広大な大会議室には、古代と揚羽会長の二人だけが相對していた。古代は揚羽会長をじっと見据えながら考えていた。

（あと15分か…果たして間に合うんだろうか…署名は集まるんだろうか…）

古代がそう思っていると、今まで黙想していた揚羽会長がおもむろに口を開いた。

「さて時間だ！古代艦長、君の処分は決まったな！」

「会長！時間はまだ15分あります！何故待てないんですか！？」

「確かに時間はまだある…だが今だに誰も来ないではないか？署名が集まらないのでみんなとづくに諦めてしまったのだよ！」

「会長！自分はどんな状況にあるかと、諦めるつもりはありません！例え残り一分一秒だとしても！」

古代が力強く切り返していると、クワトロを始めとするロンド・ベールのメンバーが大会議室に入ってきた。

「みんな…来てくれたのか！」

「済まない…集計に手間取ってな…それで遅くなった…」

古代の問い掛けにブライトが答え、アムロとヘンケン、それにフォ

ツカーが山ほどある集計用紙の束を揚羽会長の机上に載せていた。それでもなお不敵な笑みを浮かべた揚羽会長は、ブライトに問い掛けていた。

「それで…結果は出たのかねブライト大佐…？」

「もちろん全員一致です…古代大佐解任要求に全員が“ノー”と言う回答がありました！」

ブライトの発言で、今の今まで余裕の表情を浮かべていた揚羽会長の顔がひきつり、慌てて机上の用紙をめくり始めてチェックを開始していたが、どれも古代を支持する旨ばかりが目立ち、中には揚羽会長個人に対する批判も書かれている始末であった。

「そ、そんなバカな事が…誰か一人でも賛成の人がいるはずなんだが…」

慌てふためいている揚羽会長の前に、その場にいた一同の中からモンシアが現れ、怒りをぶちまけていた。

「いるワケねーよバカ会長！大体な、どこの世界に歴戦の英雄をクビにしろって奴がいるんだ！？大佐はな、俺達ロンド・ベルの希望の星だ！」

モンシアの発言にロンド・ベル一同から拍手喝采が寄せられ、揚羽会長はますます頭に血が上っていた。

「ええい…貴様ら…全員この場でクビにしてやろうか……！？」

揚羽会長が怒りに身を任せていると、クワトロが静かに語り始めていた。

「会長…あなたのやり方は横暴過ぎる…これだけ多くの人々が古代大佐を支持しているのだから素直に認めて頂きたい…その中にはあなたの側近も含まれているんですがね……」

「な…何だと…」

揚羽会長が驚くと、側近の一人が前に出て辞表を突き出し、何も言わずにその場を立ち去って行った。

その様子を見たクワトロはさらに揚羽会長に切り出していた。

「もしこの結果にご不満があるのならこのマクロスを降りても構いませんよ…どうせあと二日でリンボスに到着するのですから…」

「言われなくともそうさせて貰う！貴様らの顔を見るつもりもない！」

そう言い放った揚羽会長は、大会議室を出て行く前にクワトロの耳元で呟いていた。

「私はお前の正体を知っているぞシャア・アズナブル…覚えてろよ……」

「知っておいででしたか会長…ロンド・ベルの人間はみんなとくに私の正体を知ってますがね……」

クワトロの意外な反撃に何も言わず、揚羽会長はその場から退出して行った。

「ありがとうみんな…どうにかクビは繋がったようだな…」

古代はそう言うと、ブライトやクワトロ達と握手を交わし、ユキの側に来ると思わず彼女を抱きしめていた。ユキも涙を流しながら古代にそっと囁いていた。

「良かった…あなたが辞めさせられなくて…」

「ユキ…君にも迷惑かけてゴメン…」

今にもキスしそうな雰囲気の二人に、フォッカーが咳ばらいをしなから咳いていた。

「あゝ……その……お前ら公衆の面前でラブシーンやるつもりか？
ここにはジュードー達未成年もいるんだぞ……他でやれ！」

フォッカーのその一言で古代とユキは体を離し、思わず顔を赤らめると周囲はたちまち笑い声で溢れ返っていた。

第12話―ブラインド・ゲーム―（その8）（後書き）

気が付けば今回で100話目……

作者の下手くそな文章ながら、ご愛読いただきありがとうございます。

これからもこの物語は続きますので、飽きずにお読み下さいませ…

次回、コウとケリィが久々の再会……

第12話―ブラインド・ゲーム―（その9）

―同日 21:46 マクロス艦内展望室―

コウとニナは、マクロス艦内の展望室で窓外に広がる星空を眺めつつ、先程までの出来事を話していた。

「とにかく良かったわね…古代大佐がクビにならなくて…」

「ああ…あの人をクビにするなんて、あの会長何考えてるんだか…」

「ホント…でもあの顔見た？“このままでは済まさんぞ”って…」

…クワトロ大尉にまで凄んでたわよ…」

「ああ…でも大尉は軽く受け流してたけど？」

「さすが“赤い彗星”だけあるわね。」

ロンド・ベルのほとんどの者が、クワトロの正体がシャア・アズナブルである事を知っていた。ニナのような外部の人間でも彼の正体を知っているくらいであるため、それほど彼の知名度は高かったのである。

「でもさ…あの時まさかニナがモンシア中尉を殴るなんて、夢にも思わなかったよ…あれがなければ僕が中尉を殴ってたかも…」

コウの発言を受け、ニナはその時の事を思い出し、思わず顔が真っ赤になっていた。

「だって…あの状況じゃああするしかなかったのよ…私、人を殴るなんて初めてだったから…とにかく中尉はショックみたいだったけど…でも、私だったから良かったけどコウだったら上官侮辱罪で訴

えられるわよ！」

「……………」

二ナの発言にコウは思わず押し黙っていた。モンシアを殴って退役しても構わないと思っていたのに、いざ他人からそんな罪名を言われるとは思ってもみなかった。

そんな中コウは後ろから肩を叩かれ、振り向くとケリイが立っていた。

「ようウラキ、久しぶりだな……」

「ケリイさん！お久しぶりです！……って言うよりどうしてここに……？」

「“奴ら”……じゃなかった……ゼントラーディとやらの捕まっていたそうだな……お前がいない間に、俺もロンド・ベルに参加するはめになってな……」

「あの……ラトーラさんはどうしたんですか？確かあの後結婚したって聞いたんですが……」

コウの問い掛けに、ケリイは一瞬躊躇したものの、静かに語り始めた。

「ラトーラは……シーマの手の者によって殺された……だから俺はシーマに復讐するために、ロンド・ベルに参加する事にしたんだ……」
「……………そうだったんですか……あれ？ケリイさん……左腕が……ありますけど……？」

コウがよく見ると、以前出会った時に無かったはずの左腕がある事によろやく気付いていた。

二ナはクスクス笑うとコウにその理由を説明していた。

「実はね…ヤマトの真田副長がわざわざネエル・アーガマに来て、
“右腕だけでは何かと不便だから義手を作ろう”なんて言って…た
った一日で作ってくれたんですって…真田副長も幼い時に事故で両
手両足を失って、それ以来義手義足だけどなんの問題も無いそうよ
…」

「そうだったんですか…ケリイさん、使い勝手はどうですか？」

「ああ…悪くない…とにかく今まで何かと不便だったからな…その
分これから先頑張るつもりだ…俺はシーマをこの手で討ち果たすま
で生き延びて見せる……」

第12話―ブラインド・ゲーム―（その9）（後書き）

この話の後日談……

コウ・ウラキ

「真田さんの義手義足って爆弾なんだそうですが、ケリイさんの義手も、外すとライフルが現れたり、腕自体を飛ばせるとか武器になつて……」

ケリイ・レズナー

「そんな事ある訳ない！」

………ベタな寸劇でした………

次回、シーマ様再び登場！

第13話―暗礁空域にはご用心!?(その1)

―A・D・2205 9・27 9:01 暗礁空域“茨の園”―

暗礁空域――ここはかつての一年戦争…そして様々な戦いによって発生したコロニー及び艦船の残骸が自然に集まっている場所である。その中にある二年前の“星の屑作戦”の立役者だったネオ・ジオンのエギーユ・デラーズ中将が設置した基地“茨の園”では、シーマ率いる艦隊が次なる作戦に向けて鋭気を養っていた。

旗艦リリーマルレーンのブリッジでは、シーマが副官のコッセルから報告を受けていた。

「……………で、それは本当なのかい… ロンド・ベルの連中がこの空域に近付きつつあるってのは?」

「はい…連中は本拠地であるロンデニオンに向かうには、この空域を通るのが一番の近道と言う事だそうです……………」

コッセルの報告を聞いたシーマは持っていた扇子を口元に近づけ、しばらく思索すると不敵な笑みを浮かべながら切り出していた。

「フン…ここはとにかく小手調べと行くか……………全艦に通達!直ちに出撃してロンド・ベルを牽制する!」

「了解しました!」

シーマの命令は直ちに通達され、準備が完了した艦は順次出撃していった。

―同日 同時刻 ヤマト第一艦橋―

その頃、古代とユキは一ヶ月ぶりにヤマトに帰艦していた。格納庫から第一艦橋へと向かう道すがら、古代は多くのクルーから熱い歓迎を受け、思わず目頭が熱くなっていた。

そして第一艦橋に着くと、艦長席エレベーター脇に掲げられている初代艦長沖田十三のレリーフに向け敬礼していた。

（沖田さん…僕は敵陣から無事に帰って来ました…これもあなたのおかげです……）

そんな彼の元に第一艦橋メンバーが近付き、改めて帰還を喜んでいった。

中でも土門は涙を流しつつ古代の手を握り締めていた。

「艦長、よくご無事で…」

「土門…それにみんな…この一ヶ月間ヤマトを…ロンド・ベルを守ってくれてありがとう……」

返答する古代の目にも涙がうつすらと光り、それにつられてメンバーも目頭を熱くしていた。

そんな中、通信が入ったシグナルが点灯し、相原がそれを受けていた。

「艦長、アルビオンより入電！“これより先、暗礁空域につき、本艦とクラップ級巡洋艦五隻が先行する”との事です！」

「分かった！シナプス艦長によりしく伝えてくれ！土門！これより先、何があるか分からない…全艦隊に戦闘配備を命じてくれ！それから太田にユキ、この先ミノフスキー粒子が濃い場所を通るからレ

「ダーに気をつけてくれ！」

「了解！……！」

矢継ぎ早に出される古代の命令を聞いていた島は、操縦桿を握りながら思っていた。

（さすがロンド・ベル司令だけの事はある……一ヶ月いなかったブラ
ンクを全然感じさせない……それでこそいつもの古代だな……）

第13話―暗礁空域にはご用心!?!―(その2)

―同日 9:25 アルビオンメインブリッジ―

ロンド・ベル本隊より先行していたアルビオン艦隊は、暗礁空域に差し掛かるやいなやネオ・ジオン艦隊らしき反応を捉えており、アルビオンのブリッジではモニターを監視していたレーダーオペレーター、シモンの報告を始めていた。

「艦長!前方30宇宙キロにネオ・ジオン艦隊展開中!数およそ10隻前後です!」

「やはりな…連中がこの辺りで待ち伏せしているだろうとは思っていたが案の定…しかし数は少ないな、本隊はどこかにいるに違いない…総員第一級戦闘配備!各MS隊は発進準備を急げ!それからモーリス、この事をヤマトに打電してくれ!」

「了解!」

シナプスは各部署に指示を出し、一息つくと思いを巡らせていた。

(……しかし、これまで異星人と戦って来た古代大佐はどう思っているのだろうか……同じ地球人同士が争うこの星系の現状を見て何を感じるのだろうか……)

だが、その思いはもう一人のレーダーオペレーターのスコットの報告によって掻き消されていた。

「敵、ザンジバル級巡洋艦が砲撃開始!当艦隊到達まであと30秒

！」

「そんなものただの脅しに過ぎん！無視しろ！」

シナプスの叫び声と同時に、リリーマルレーンが放ったエネルギー弾は艦隊をかすめ、同行のクラブ級巡洋艦5隻のうちアルビオンの前方に展開していた2隻：ナッソーとエムデンが独自の判断で砲撃を開始していた。

「モーリス！ナッソーとエムデンに打電しろ！こちらの位置が分かっってしまう！直ちに止めさせる！」

シナプスがモーリスに指示していると、スコットがさらに報告していた。

「砲撃第二弾、来ますっ！あと20秒！」

「パサロフ！直ちに回避！左15度転舵！」

「了解！左15度転舵！」

シナプスの指示のもと、アルビオン艦隊は回避運動に入ったものの、回避が間に合わなかったエムデンはともにリリーマルレーンからの砲撃を浴びて轟沈していた。

―同日 9：31 リリーマルレーンメインブリッジ―

「敵巡洋艦一隻、撃沈を確認！」

リリーマルレーンのブリッジでは、観測員がシーマに報告を入れていた。

「フハハハハッ！見たかい？連中は大慌てじゃないか！前衛艦隊があの調子じゃロンド・ベル本隊も似たようなもんさね！MS隊の発進準備が出来次第、さっさと出撃してあいつらを蹴散らしてしまえ！」

シーマは指示を出すと、ソファでくつろぎながら思っていた。

（……どうやら今回は私の出番はなさそうだねえ……）

第13話―暗礁空域にはご用心!?!―（その2）（後書き）

今回の話は“0083”第5話を元にしております

これからも原作を彷彿とさせるシーンを描くと思うので、似たようなシーンが出て来たらぜひともその場面を想像して下さいませ…

ウケる事間違いなし……

第13話―暗礁空域にはご用心!?!―（その3）

―同日 9:35 ヤマト第一艦橋―

ヤマトでもアルビオン艦隊とシーマ艦隊の交戦の様子が捉えられていた。

「艦長！アルビオンより入電、救援要請です！既にクラブ級巡洋艦一隻撃沈されたそうです！」

相原の報告に、古代は躊躇する事なく決断していた。ブライトとの部隊司令引き継ぎの際、“ネオ・ジオンと戦う事になっても迷っていないといけない…”と申し送りされていたのだった。

「全艦隊戦闘配備！直ちにアルビオン艦隊に救援を送る！土門、主砲発射準備！」

「了解…でも艦長、相手は同じ地球人ですよ…」

「土門…迷っている暇はない…何もしなければこちらがやられてしまふ…分かるな……？」

「分かりました…主砲発射準備！」

迷いから解放された土門は、テキパキと各部署に指示を出していた。そんな中古代は、遙か後方に展開しているであろうゼントラーディ軍の動向が気になるのか、レーダー席のユキに問い掛けていた。

「ユキ、ゼントラーディ艦隊の様子はどうだ？」

「今の所艦隊後方200宇宙キ口地点に展開中！速度変わりありません！」

ユキの報告に、古代は思いを巡らせていた。

（ゼントラーディの奴ら、俺達をプロトカルチャーだと思って手を出して来ないようだ……だが、いつまでこのままの状態が続くんだろうか……？）

―同日　9：37　マクロスメインブリッジ―

「デルタ1より艦隊所属全機へ！直ちに出撃してアルビオン艦隊を援護して下さい！」

マクロスメインブリッジでは、いつもの未沙らしい的確な管制指示が響き渡り、それを見ていたクローディアは合間を見て彼女に話し掛けていた。

「いつもの調子に戻ったようね未沙？」

「そりゃそうよ。いつまでも休んでられないから……それに一ヶ月もユキさんに迷惑かけたから……」

未沙が恐縮していると、間もなく発進しようとしていたフォッカーより通信が入っていた。

『こちらスカルリーダー！これより発進する。指示頼みますよ、お・ば・あ・ち・や・ん・！』

フォッカーのその発言に未沙は思わず絶句していた。“おばさん”ならともかく、年寄り扱いされるとは思っても見なかったからであった。

「ちょ…ちょうど少佐！どういふ事ですかっ！？人を年寄り扱いしないで下さい！」

『ジョークだよ早瀬！なんせこの前の帰還パーティーの席でお前さん“浦島太郎の気分です”って言ったろが！それに下ネタじゃ、お前さん嫌がるだらうしょ！』

「少佐聞きましたよ！私がない間、ユキさんを下ネタで困らせたそうですね！？この事を古代大佐には後で報告しますので！」
『いいじゃね？か！これもユキに対する俺流の愛情表現だ！あいつも分かってくれるって！んじゃ行きまっせ！』

そう言うが早い、フォッカーはさっさと自機を発進させて行った。

第13話―暗礁空域にはご用心!?!―(その4)

―同日 9:46 暗礁空域モンシアのジェガンコクピット―

「あゝ、まったく！敵の数が多過ぎだ！何とかなんねえのか!?!」

モンシアは自機のコクピットで叫んでいた。先に撃沈されたエムデン以外にクラップ級巡洋艦のうち残っているのは二隻のみで、その艦も中破状態でまともに無事なのは旗艦のアルビオンのみと言う有様であった。

『ぶつくさ言うなモンシア！そのうちロンド・ベル本隊から援護が来る！それまでもたせるんだ!』

バニングの激励に、モンシアは溜め息をつきつつ切り返していた。

「……そりやそうですがねえ少佐……それよりウラキの奴はコアファイターで出撃したのはいいが、どこにいるんですか!?!」

『心配するな……ウラキは今ある所で索敵中だ……それともまた逃げちまったと思ってたとか!?!』

「……当たり前です少佐……!!敵MS第二弾接近中ですぜ!」

モンシアが指した方向には、ネオ・ジオンのギラ・ドーガが大学に來襲しつつあった。

しかしその時、攻撃を加えようとしたギラ・ドーガ部隊が突然爆発を起こし、それを見ていたモンシアは思わず呆然としていた。

「……何だあゝ!?!奴らいきなり爆発しちまったぞ……一体何が……?」

『ヤッホー！どうにか間に合ったみたい！ヒゲのおじさん達大丈夫！？』

「やいプル！ヒゲだけは余計だっつーの！」

相変わらず天真爛漫なプルに、モンシアが噛み付いていた。先程の攻撃は、プルとプルツーが駆る二機のキュベレイから放たれたファネルによるオールレンジ攻撃であった。

モンシアとプルの掛け合いに、プルツーまでが加わっていた。

『まあここはうちに任せときなヒゲ親父殿！』

「おいプルツー！俺はどこぞのアニメキャラか！？」

『いや…どちらかと言えば某ゲームに出てきそうなキャラだな…』

二人の会話に、ようやく追い付いた百式を駆るクワトロまでもが加わると、それを聞いていたバニングが機内で頭を抱えていた。

（……こいつら何考えてるんだ……戦闘の最中だつてのに、よくそんな事が言えるもんだ…しかもあの“赤い彗星”まで……）

第13話―暗礁空域にはご用心!?!―（その4）（後書き）

劇中、クワトロが言っていた某ゲームのキャラとは、言わずと知れたあのロールプレイングゲームのヒゲ男です……

モンシアに赤い帽子をかぶせたら何となくあの男に似ていると思ったのは自分だけ…？

第13話―暗礁空域にはご用心!?(その5)

―同日 9:49 暗礁空域コアファイターコクピット―

その頃コウはコアファイターを駆り、シーマ艦隊の正確な位置を探るべく暗礁空域を飛行していた。

高度をとりつつも残骸に紛れて目立たないようにしていたおかげで、敵からの攻撃にも逢う事もなかった。

(ネオ・ジオンの奴ら、暗礁空域のおかげで目立たなさ過ぎだ…とにかく正確な位置を早いとこ掴んでヤマトに打電しなければ…でも仮に連絡出来たとしても攻撃出来るのか…ここからどう見ても本隊までは100宇宙キロ以上あるぞ…)

コウがコクピット内で周囲に目を配りながら思いを巡らせていると、眼下の暗礁空域の隙間にシーマ艦隊が待機しているのを発見していた。

(いた!敵はザンジバル級巡洋艦を中心としておよそ10隻前後…ロンド・ベル本隊からの位置、104宇宙キロ…10時方向か…奴らに気付かれないように暗号電で報告だ…)

―同日 9:51 ヤマト第一艦橋―

その頃、コウからの暗号電文をキャッチしたヤマトでは全主砲の発射準備が行われていた。

『一番主砲発射準備完了!』

『二番主砲発射準備完了!』

『三番主砲発射準備完了しました!』

全砲塔からの報告が第一艦橋になされ、艦長席の古代は土門に発射命令を下していた。

「土門、全主砲直ちに発射だ!」

「了解!全主砲目標地点、104宇宙キロ先のネオ・ジオン艦隊に向け発射!」

土門が発射ボタンを押すと、九門の主砲からエネルギー弾が発射され、遙か先のネオ・ジオン艦隊へと向かって行った。

―同日 9:53 リリーマルレーンメインブリッジ―

一方、リリーマルレーンメインブリッジでは、なかなか進展のない戦況にシーマが次第に苛立ちを募らせていた。

「一体どうなってるんだい!?前衛艦隊を壊滅させられないなんて!」

「はあ……こんなはずではなかったんですが…」

コッセルが困惑の表情でシーマに言い訳をしていると、観測員から驚愕の報告がなされていた。

「シーマ様!高エネルギー弾反応多数、当艦隊に向かって来ます!」

「何バカな事言ってんだい！何かの間違いじゃ……」

シーマが言い終わらないうちに、遙か先から伸びて来たエネルギー弾がネオ・ジオン艦隊に突き刺さり、リリーマルレーン以外の艦全てが爆発四散していった。

「本艦以外の艦は全滅です！」

観測員の報告にシーマは言葉を失い、茫然自失となっていた。

（一体どこから…あんな遠距離から正確に撃ち抜く事が出来る艦と
言えば……ヤマトか！？）

一瞬のうちに悟ったシーマは直ちに通達を開始していた。

「……一旦撤収だ……“茨の園”に進路を取れ……」

―同日 9：55 ヤマト第一艦橋―

「ネオ・ジオンの残った艦が戦闘空域から離脱の様です！」

第一艦橋でユキが報告すると、その場にいた一同は安堵の表情を浮かべていた。

「戦闘配備を解除する……しかし、こう何度もネオ・ジオンを相手にするのはどうかと思うがな……」

艦長席から古代が下りて来て、島と真田に切り出していた。

「俺もそう思った…同じ地球人同士が争うのはそろそろ止めないと古代……」

「島の言う通りだ…今の我々にとって重要なのは、全地球圏が一致団結してゼントラーディに備えなければならぬんだ…」

「ええいずれ何とかしなければならぬのは確かです真田さん……とにかく今から善後策を考えますので艦長室で打ち合わせしましょう……島、後を頼む……」

「了解！」

古代と真田が第一艦橋から出て行くと、島が一言呟いた。

「……しかし古代も大変だな…あまり根を詰め過ぎて倒れなければいいが……」

第13話―暗礁空域にはご用心!?!―（その5）（後書き）

この話、ヤマト完結編をベースにしました…

完結編よりは距離は短いものの、遥か先から正確に敵艦を撃ち抜く
ヤマトの強さにはシーマ様も驚いた事でしょう……

次回以降、アルビオンに配属される予定の新型ガンダムを巡って、
またもやモンシアがひと騒動!?!?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4770v/>

銀河伝説—鋼鉄の咆哮—

2011年10月29日23時12分発行